

コウノトリ育むお米のひみつ
STORK NATURAL RICE

K O M E

米

コウノトリと共に生きる
自然美 × 美食

— 兵庫県豊岡市 —



CHARACTERISTIC

コウノトリ育むお米の特徴

Episode

日本の空から一度は絶滅したコウノトリの、半世紀にも及ぶ復活への道のりで、
 多様な生きものを育むお米が生まれました。
 コウノトリと共に生きるまち“豊岡”で、農薬や化学肥料に頼らず、
 手間と愛情をかけ、食味にもこだわって育てました。

コウノトリ育むお米



特別栽培米 兵庫県但馬産コシヒカリ

無農薬タイプ	節減対象農薬：栽培期間中不使用 化学肥料（窒素成分）：栽培期間中不使用
--------	--

減農薬タイプ	節減対象農薬：当地比 7.5 割減 化学肥料（窒素成分）：栽培期間中不使用
--------	--

ラインナップ

	精 米				パックご飯 200g
	300g	450g	2kg	5kg	
有機 JAS					
無農薬 タイプ					
減農薬 タイプ					

食感と食味

こだわりポイント

コウノトリ育むお米は、大きめの **1.9ミリの網目** で選別しています。
 粒ぞろいが良くなり食感が上がるとともに、高い食味を得られます。

受賞歴

- 2009年 第1回生物多様性 日本アワード 保全プロダクト部門 優秀賞〔環境省、公益財団法人イオン環境財団〕
- 2010年 第12回グリーン購入大賞 環境大臣賞〔グリーン購入ネットワーク〕
- 2013年 第42回日本農業賞 特別部門「第9回食の架け橋賞」大賞〔JAグループ〕
- 2016年 米・食味分析コンクール国際大会 金賞〔米・食味鑑定士協会〕
- 2017年 クールジャパンアワード 2017〔一般社団法人クールジャパン協議会〕

GLOBAL G.A.P

2018年1月、JA たじまが「コウノトリ育むお米」（無農薬・無化学肥料）で GLOBAL G.A.P のグループ認証を取得しました！

コウノトリ育むお米の優れた成分

● マグネシウム (Mg)

【特長・身体での機能】

不足すると、筋肉の痙攣、ふるえなどを招き、抑うつ状態、不安を訴える。

● 亜鉛 (Zn)

【特長・身体での機能】

欠乏すると生殖機能が低下し、免疫機能も低下する。味覚障害の原因の1つでもあり、潜在的な患者は多い。

● マンガン (Mn)

【特長・身体での機能】

不足すると、骨の発育不良や生殖能力の低下をきたす。

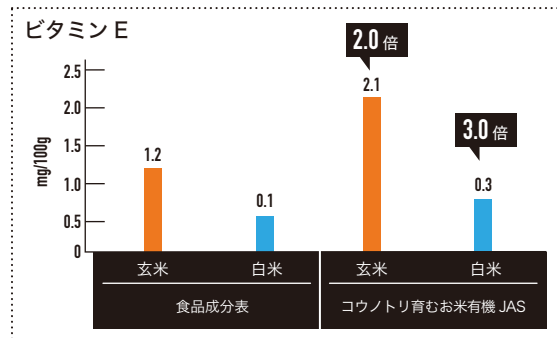
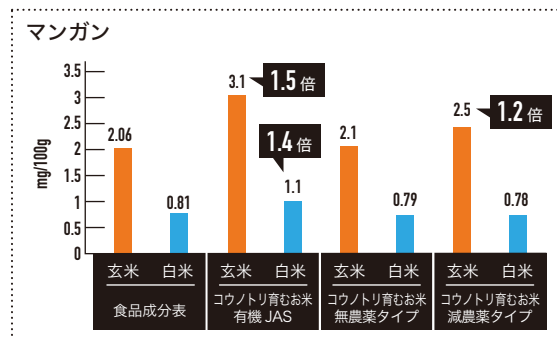
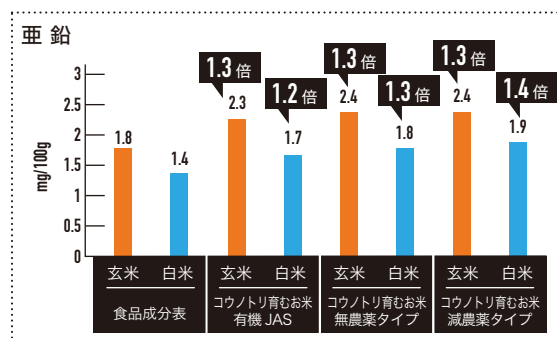
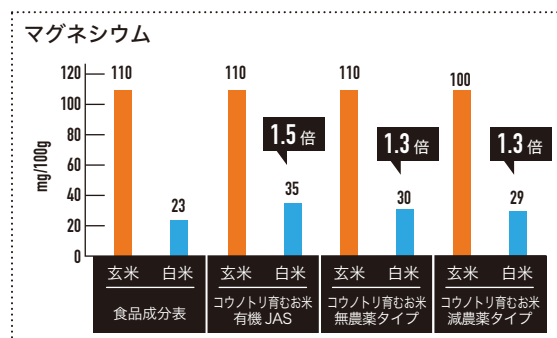
● ビタミン E (VitaminE)

【特長・身体での機能】

不足すると血行が悪くなり、冷え性や頭痛、肩こりなどを起こしやすくなる。

血管を健康に保つほか、血中の LDL コレステロールの酸化を抑制したり、老化防止にも効果がある。

	1日あたりの 摂取推奨量 (mg)		茶碗1杯に 含まれる量 (mg) <small>※コウノトリ育むお米有機 JAS の場合</small>	
	成人男性	成人女性	玄米	白米
Mg マグネシウム	320~370	270~290	82.5	26.3
Zn 亜鉛	9~10	7~8	1.7	1.3
Mn マンガン	4	3.5	2.3	0.8
ビタミンE	6.5	6.0	1.6	0.2





HISTORY

「コウノトリ育む農法」の誕生

豊岡のシンボル“コウノトリ”

コウノトリは羽を広げると2メートルにもなる大型の鳥です。
 かつては日本各地に生息していましたが、戦後の経済成長に伴う生息環境の悪化で激減。
 日本で最後までコウノトリが生息していた豊岡では、コウノトリを保護し再び自然界へ帰す
 「コウノトリ野生復帰プロジェクト」に、1965年から取り組んできました。



“田んぼ”の変化が コウノトリを絶滅させた

コウノトリは、田んぼや川の浅瀬で、カエル・ドジョウ・ナマズ・フナなどの生きものを食べて暮らしています。その量は1日あたり約500g。コウノトリが生きていくためには、自然界にエサとなる大量の生きものがが必要です。しかし、除草や害虫駆除のために撒かれた農薬が、多くの田んぼの生きものの命を奪いました。エサを失い、農薬に体を蝕まれたコウノトリは、繁殖力を失い、最後には飛ぶ力さえ残っていませんでした。

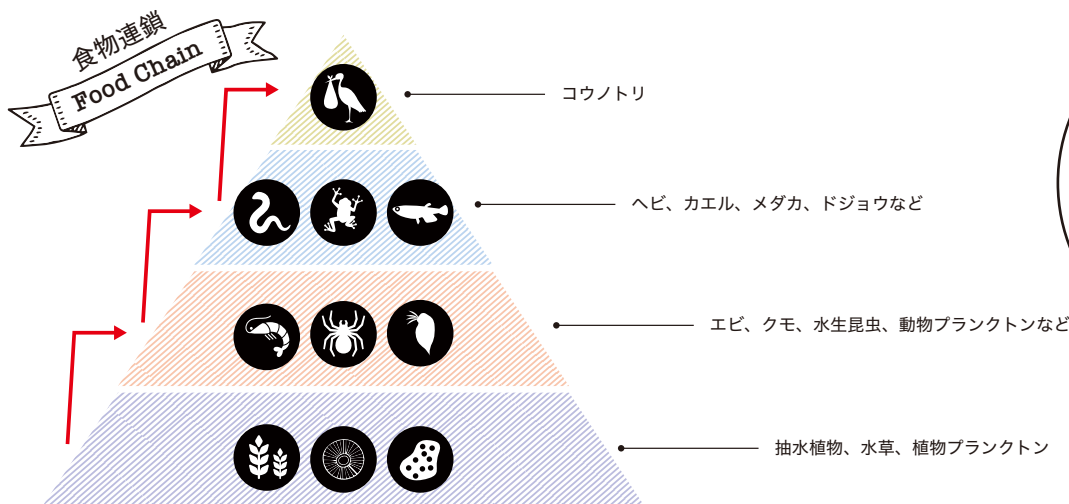
コウノトリ復活の要は“農業”

豊岡では、コウノトリの保護から24年後の1989年、長い苦難の道のりを経てコウノトリの人工繁殖に成功。2005年には、コウノトリを自然界に放して野生復帰を目指す取組みもスタートしました。再び自然界で暮らすようになったコウノトリは、生きていくために大量のエサ（魚や虫、へび、カエルなど）を必要とします。コウノトリの主な生息地である“田んぼ”を“生きものいっぱい田んぼ”にしなければなりません。コウノトリ復活のプロセスで、最も変わらなければならなかったもの…。それは“農業”です。



コウノトリってどんな鳥？

体長が1.1m、羽を広げると2mにもなる大型の鳥です。体重は4~5kg。肉食で魚類をはじめ、カエル、へび、バッタなどの生きた小動物をエサとします。大食漢で飼育下では1日に約500gのエサを食べます。



「コウノトリ育む農法」の広がり //

2005年のコウノトリ放鳥以後、野外での繁殖も進み、自然界で暮らすコウノトリは順調に増えていきました。それに伴って「コウノトリ育む農法」による米作りも増加。最初、数件の農家から始まった取組みは、若手生産者や、無農薬栽培を目指して1ターンした生産者にまで広がり、『コウノトリを農業で支える』というスタイルが定着していきました。今では、市内の400ヘクタールを超える田んぼで「コウノトリ育む農法」が行われています。「コウノトリのエサを増やす」という明確な目的のもと、農薬や化学肥料に頼らず、美味しいお米と多様な生きものを同時に育む「コウノトリ育む農法」が誕生しました。



// 田んぼと生きもの //

共生

Symbiosis



5668種類……日本の田んぼにいる生きもの数です。

ほ乳類50種、鳥類189種、魚類143種、昆虫1726種、植物・コケ類2075種など、

トータル5668種類。多様な生きものが絶妙なバランスでつながり合う田んぼは、

多くの絶滅危惧種にとって最後の生息地になっています。

そして私たち人間も、5668種類の生きものの一つ。

「命あふれる田んぼ」それがコウノトリ育む農法のコンセプトです。

なにげない毎日のなかに、世界でここにしかない風景があります。
コウノトリ復活の長い物語の一端をショートムービーでお届けします。

映像 コウノトリ野生復帰映像
「コウノトリと共に生きる」



動画の視聴は
こちらから









農薬や化学肥料に頼らない農法

「コウノトリ育む農法」は、できるだけ農薬や化学肥料に頼りません。生きものへのインパクトを最大限に減らす工夫を行い、多様な生きものを育みます。

		無農薬タイプ	減農薬タイプ
育苗	種子消毒	お湯・酢による消毒	
	殺虫・殺菌剤	不使用	
栽培	殺虫剤	不使用	
	除草剤	不使用	75% 削減
	化学肥料	不使用	
その他	あぜ草の除草	除草剤の使用禁止	

※減農薬タイプで使用する除草剤は、魚毒性が低いものに限って使用が認められています。

米作りを支える生きものたち

「コウノトリ育む農法」の田んぼでは、コウノトリはもちろん、カエルやトンボのように日本の故郷を代表する生きものをはじめ、メダカやゲンゴロウなどの希少な生きものも数多く見ることができます。特に殺虫剤を使わないことで、多様な生きものが暮らせる自然環境が広がっているのです。

一方で、殺虫剤を使わないことは、稲の汁を吸うカメムシや、葉を食べるバッタなどの害虫を発生させてしまいます。そこで役に立つのが、害虫を食べるクモやトンボ。これらの虫は「益虫」と呼ばれて、この米作りには欠かせないパートナーになっています。田んぼでよく見かけるカエルも、害虫を食べてくれる有能なパートナーです。



かつて、「一粒のお米には7人の神様が宿る」と言われてきました。
このお米には「数えきれないほどの生きものの命」が宿っています



無農薬のお米づくりに欠かせない大事なパートナー



トンボ



カエル



クモ

折り合い

「よくよく考えてみたら、生物多様性っていうのは、なにも動物に限ったことじゃない。田んぼに生える雑草も生きものの一つだ。僕が作るお米や大豆を邪魔しない程度に生えるくらいなら、別に構わないじゃないかと考えるようになってきた。そうしたら気が楽になった。」

無農薬を中心に米作りを続ける農家の言葉です。徹底的に雑草や害虫を駆除しようとするのではなく、自然と上手く折り合いをつけて生きる。そんな“心の持ちよう”が、「コウノトリ育む農法」に取り組む豊岡のスタンダードになりつつあります。



生きものを増やす工夫

コウノトリ育む農法のキーワードは、

“農薬や化学肥料に頼らず、美味しいお米と多様な生きものを同時に育む”

そこで一年中、コメ作りをしながら様々な手段で「生きものを増やす工夫」が施されています。



水路と田んぼをつなぐ「水田魚道」

水路で暮らすフナやドジョウ、ナマズなどの淡水魚が、水田魚道を遡上して田んぼで産卵します。温かくエサの豊富な田んぼで成長した稚魚は、やがて水田魚道を下降して水路で生活します。田んぼのまわりに淡水魚を増やすことの出来る水田魚道は、豊岡市内に約140か所設置されています。



稲刈り後の田んぼに水を張る「冬みず田んぼ」

稲刈りの終わった田んぼに水を張ると、微生物やイトミミズが増えて、稲作に適した土づくりの手伝いをしてくれます。また冬みず田んぼは、アカガエルの産卵場所や渡り鳥の越冬場所にもなるなど、多くの生きものにとって役立ちます。





このお米を食べること。それは環境への貢献活動でもあります。

小学生たちの想いをカタチに //////////////////////////////////////

こんな話があります。

2007年7月31日、市内の人工巣塔から、国内の野外では46年ぶりにコウノトリのヒナが巣立ちました。懸命にエサを運び続ける親鳥の姿。必死で生き抜こうとするヒナの姿に、誰もが胸を打たれました。その様子を間近で観察した小学生の子どもたちは、こう思いました。

「もっとたくさんのコウノトリを空に帰したい。そのためには、もっともっとコウノトリ育む農法の田んぼを広げる必要がある。」

「どうすればいい？ そうだ、消費を増やせばいい。自分たちがもっと食べればいいんだ。」

学校給食に出てくるご飯を、コウノトリ育むお米にすればいい！（ちょっと高いらしいけど）」



子どもたちが市長に直談判

子どもたちは、市役所を訪ね、自ら市長に直談判しました。市長は彼らの行動力に感動し、可能な範囲で学校給食にコウノトリ育むお米を使うことを約束しました。

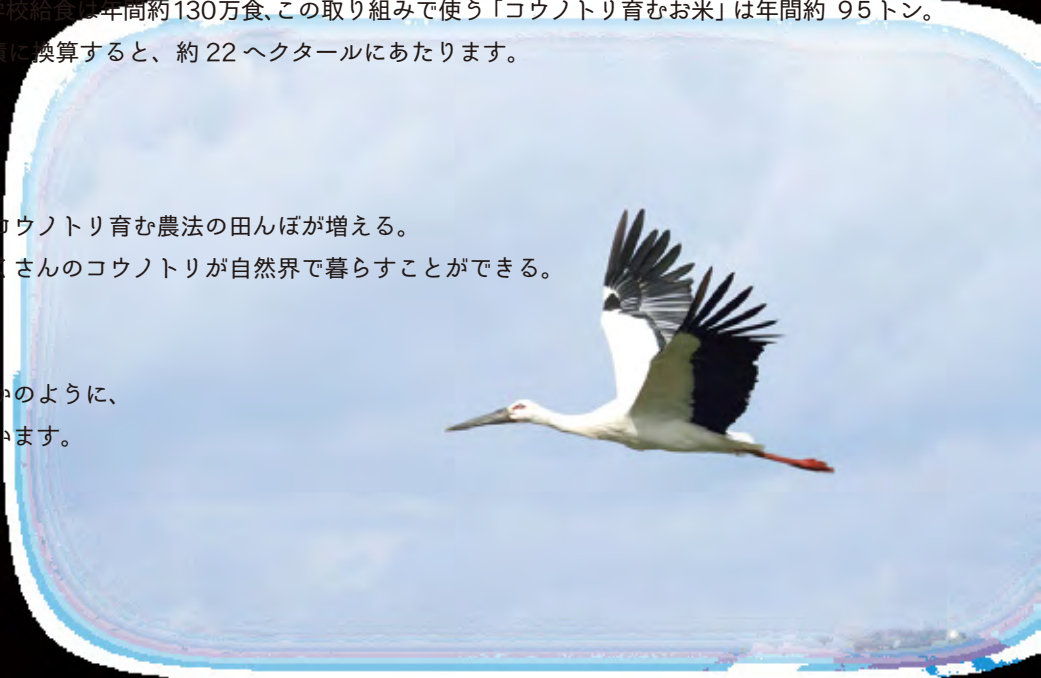
翌年の9月、2か月に3回の割合でコウノトリ育むお米の使用がスタート。それから週に1回2回と割合を増やし、今では週5日すべての給食で「コウノトリ育むお米」を使っています。

豊岡市学校給食年間約130万食、この取り組みで使う「コウノトリ育むお米」は年間約95トン。水田面積に換算すると、約22ヘクタールにあたります。

このお米の消費が増えれば増えるほどコウノトリ育む農法の田んぼが増える。多様な生きものがイキイキと暮らし、たくさんのコウノトリが自然界で暮らすことができる。

“食べる”という貢献。

子どもたちが考えたシナリオを応援するおかげで、今日もコウノトリは大空を悠然と舞っています。



コウノトリのいる風景



雪が溶け、暖くなるにつれて、
生きものの動きが活発になります。
田んぼで農作業が始まると、
生きものも繁殖の季節です。



生まれた命が大きく育ち、
里はたくさんの生きものでにぎやかです。
オタマジャクシもカエルになりました。



稲刈りが行われる頃、バッタやイナゴが
大きくなってきました。
秋は、昆虫が命を支えます。



コウノトリにとっても、冬は厳しい季節。
エサとなる生きものは、
ほとんどが姿を消してしまいます。
水辺に集まりわずかなエサ生物を探します。





コウノトリ育むお米



Toyooka City

Living with the Oriental White Storks

発行 / 豊岡市

(お問い合わせ)

668-8666 兵庫県豊岡市中央町 2-4

豊岡市コウノトリ共生部農林水産課

TEL 0796-23-1127 FAX 0796-24-7801